

牧草地に、白や黒又は緑色の所謂サイロフィックス（サイレージ）が転がっているのを見かけよう。牧草をロールベイラーなるものでラッピングするのであるが、1つのラップで10個余りのサイロフィックスが出来る。市場価格は、数千円、高いのは8,000円程度らしい。さて、サイロフィックスの色が何故違うのか、御存知だろうか。農家の方に確認して貰った。明確な区分原理がある訳ではないが、すぐに発酵させて、牛に食させることを企図する場合には、黒を、比較的長くたとえば通年保存しようと思えば、白い色のビニールを、その中間的な期間を狙う場合には、緑とかその他の色を使う農家がある。時には、刈り入れ月の区分を色で行っている農家もあるようだ。

（閑話休題）

当地に限らず北海道の地名はその由来をアイヌ語に求めることが出来る。道東内を走っている時に地名を確認してみると〇〇ベツとか、ポロ（ホロ）という地名に遭遇する。「ベツ」は川という意味である。「ホロ或いはポロ」と言うのは「広い」ということである。「ペンケ」は「川下」であり、「ナイ」は「谷若しくは河」を意味し、「サツ」は「乾いた」等々は広く用いられるアイヌ語であり、これらの言葉の意味を知ってその地域を通ると、さもあらんという気がするから不思議だ。管内 49 市町村の名前にもアイヌ語が使われている。

十勝支庁

- ① 芽室町：アイヌ語「メムウロベツト」より、転訛したもので、池より流れてくる川の意味である。
- ② 清水町：清水は、アイヌ語「ペケレベツ」を意識したもので、明るい川という意味から清水の字を当てて命名された。
- ③ 新得町：新得はアイヌ語「シントク」に新得の字を当てたもので、清らかな水の流れるところと言う。
- ④ 鹿追町：鹿追は、アイヌ語「クラクウシ」を意識したもので、鹿を追うと意である。昔、アイヌは溪谷に柵を設けて、奥山から鹿の群れを追い込み、捕獲した。
- ⑤ 士幌町：士幌は、アイヌ語「シホロ」に士幌の文字を当てたもので、広大な土地という意である。
- ⑥ 上士幌町：明治 6 年士幌村より分村した際、上の字を冠して命名した。
- ⑦ 音更町：音更はアイヌ語「オトゥ」より転訛したもので、髪の毛という意である。音更川の流れが恰も風に乱れた髪の毛のようであるから、これを形容した。
- ⑧ 幕別町：幕別は、アイヌ語「マクマンベツ」より、転訛したもので、山際を流れる川という意である。
- ⑨ 池田町：池田町は、当初凋寒村と称し、後大正 2 年に川合村と改めた。これより先、明治 37 年 12 月利別太釧路に通ずる鉄道開通の際、元公爵池田件博所有の池田農場内に、停車場を設け、これを池田駅と命名した。これよりこの地一帯が池田の地名で、道内は勿論、他府県方面にも知悉された。よって、大正 15 年 7 月 1 日池田と改称、今日に至っている。
- ⑩ 本別町：本別はアイヌ語「ホンベツ」より転訛したもので、小川と言う意である。
- ⑪ 陸別町：陸別は、アイヌ語「リクンベツ」より転訛したもので、高い、危ないと言う意で

ある。利別川の付近に於いて西岸が最も高く、危険な状態にあるためである。

- ⑫ 足寄町：足寄は、アイヌ語「アショロペット」の転訛したもので、沿うて下る川の意である。地勢は美里別川及び芽登川の流域にあつて、無数の無名の川が流れていることから、アイヌはアショロペットと呼称していた。
- ⑬ 中札内村：アイヌ語「サツマルナイ」即ち「乾いた川」である。札内川下流にあるため中の字を冠したものである。
- ⑭ 大樹町：大樹は、アイヌ語「タイキ」の転訛したもので、蚤の多いところの意である。
- ⑮ 広尾町：広尾は、アイヌ語「ピロオロ」の転訛で、崖のあるところの意である。また、一説には、「ピロオロ川」の左岸に青い岩があるので、アイヌが、「ピロオロ」と称していたが、内地人が入るようになってから、「ピロオ」と訛って呼ばれた。
- ⑯ 豊頃町：豊頃は、アイヌ語「トヨコロ」より、転訛、無人という意である。昔、「コシビ」(常室)の酋長「コタノロ」(池田町の東方)を攻撃した時、「コタノロ軍」の伏兵に攻撃されて惨敗し、遂に退却して豊頃沼に投身、全滅し、無人の境となったことによりこの地名が起った。
- ⑰ 浦幌町：アイヌ語「ウライポロ」より、転訛、大きな網代という意である。
- ⑱ 忠類村：アイヌ語[チュウルイベツ]より転訛、急流という意である。
- ⑲ 更別村：アイヌ語「サラ、ベツ」「葦原の川」から出たものである。
- ⑳ 帯広市：帯広は、アイヌ語の『オペレペレ・ケプ』(川尻が幾つにも裂けているところ)が、『オペヘロ』と転訛して帯広の字が当てられた。

今回は、管内他市町村について述べたい。

(参考：道東資料館蔵「北海道郷土史」)

未だ、疑問が氷解しないのが、『何故、二つ瘤駱駝のこぶが枯れてしまうのか』と言うことです。実は、毎朝のジョギング通勤経路上に動物園があり、今までは何の気なしに見ていたのですが、この前、吃驚しました。駱駝のこぶが無くなって居るではありませんか。否、良く見ると、何故かは解らないけれども、ピント屹立している筈の瘤が中味が抜けたかフニャッとなって寝ているのです。獣医さんにも確認したのですが、解ったら教えて欲しいとのことだったそうです。当地では砂漠地帯ではないので、瘤はその目的上、必要性が無くなったので、退化或いは進歩したのではないかとの見方をする者もいますが果たしてどうなのでしょう。